

課題1：犬と人形（著者：夢野久作）

東京では、今度大地震と大火事がありまして、たくさんのひとが死にました。死ななかつたひともおうちやきものやたべものがなくなって、大変に困りました。

太郎さんと花子さんは、お父様とお母様に手を引かれて、東京の近所のばあやの処へ逃げて来ました。二人は、久しぶりに親切なばあやのお話をきいて、よろこんでおとなしくねむりました。

ところが、夜中になると、太郎さんはねむったまま大きな声を出して、「ポチ、ポチ」とよびました。すると、花子さんもねむったままで、「メリーさん、メリーさん」と呼びました。そうしてまたスヤスヤとねむりました。お父様とお母様とは顔を見合わせて、「犬とお人形の夢を見ているのですよ」「どちらも焼けてしまっただろう。可哀そうに……」と言われました。

あくる朝、太郎さんと花子さんは、二人揃ってお父様とお母様の前へ出て、「どうぞもう一ぺん東京に連れて行って下さい。あたしたちは、昨夜二人共同の夢を見ました。ポチもメリーちゃんも焼けずにいて、早くお迎えに来て頂戴っておまねきをしていましたから」と言いました。お父さんもお母さんも大層お笑いになって、「そんな事はない。犬は、逃げたかも知れないが、人形は、押し入れに仕舞ってあったのだから、きっと焼けてしまったに違いない。もうしかたがないから二人ともおとなしく遊ぶのですよ。そうしたら、今に又いい犬といいお人形を買って上げるから」と言われました。

二人は、悲しくなってシクシク泣き出しましたが、やがて花子さんはばあやのお庭の隅に、「メリーさんのお墓」と書いた木の札を立てて、コスモスやケイトーの花を上げて拝みました。太郎さんは、「ポチが生きていれば、メリーちゃんもきっと焼けないでいるよ。まだよくわからないのだから、お墓を建てるのはおよしよ」と止めましたが、花子さんはただシクシク泣いて拝んでいました。

火事がすっかり済んでから、お父様は一人でお家の焼けあとを見にいらっしゃいましたが、夕方になると急いで帰って来て、「うちはたった一軒焼け残っていた。さあみんな来い」と大喜びで、ばあやも連れて東京のおうちへお帰りになりました。

おうちに来ると花子さんは何より先に押し入れをあけて人形を見つめますと、抱き締めて飛んでよろこびました。それと一緒に太郎さんはおうちのまわりをクルクルまわって、「ポチよ、ポチよ」と呼んでいましたが見つかりませんので、ベソをかいて帰って来ました。そうして今度はお庭の隅にポチのお墓をこしらえ始めました。

課題2：雪渡り（著者：宮沢賢治）

雪がすっかり凍って 大理石よりも堅くなり 空も冷たい 滑らかな青い石の板で 出来ているらしい
のです。「堅雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて 百合の匂を撒きちらし、又 雪をぎらぎら照らしました。

木なんか みんなザラメを掛けたように 霜でびかびかしています。「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

四郎とかん子とは 小さな雪香をはいて キックキックキック、野原に出ました。

こんな面白い日が、またとあるでしょうか。いつもは 歩けない黍の畑の中でも、すすきで 一杯だ
った野原の上でも、すきな方へどこ迄でも行けるのです。平らなことは まるで一枚の板です。そして、そ
れが 沢山の小さな小さな鏡のように キラキラキラキラ光るのです。「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

二人は 森の近くまで来ました。大きな柏の木は 枝も埋まるくらい 立派な透きとおった氷柱を下げ
て 重そうに身体を曲げて居りました。「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子あ、嫁ほしい、ほしい。」
と 二人は森へ向いて 高く叫びました。

しばらく しいんとしましたので、二人は もう一度叫ぼうとして 息をのみこんだとき、森の中から
「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云いながら、キシリキシリ雪をふんで 白い狐の子が 出て来ま
した。四郎は 少しぎょつとして かん子をうしろにかばって、しっかりと 足をふんばって 叫びまし
た。「狐 こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とつてやろよ。」

すると 狐がまだまるで小さいくせに 銀の針のようなおひげをピンと一つひねって云いました。
「四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらは お嫁はいらないよ。」 四郎が笑って云いました。「狐 こん
こん、狐の子、お嫁がいらなきゃ餅やろか。」すると 狐の子も 頭を二つ三つ振って 面白そう
に 云いました。「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので 四郎のうしろにかくれたまま そつと歌いました。「狐 こんこん狐
の子、狐の団子は兎のくそ。」すると 小狐紺三郎が 笑って云いました。「いいえ、決してそんな
ことはありません。あなた方のような立派なお方が 兎の茶色の団子なんか召しあがるもんですか。私
らは全体いままで 人をだますなんて あんまりむじつの罪をさせられていたのです。」

四郎がおどろいて尋ねました。「そいじゃ ぎつねが人をだますなんて偽かしら。」紺三郎が熱心に云い
ました。「偽ですとも。けどし 最もひどい偽です。だまされたという人は 大抵お酒に酔ったり、臆病で
くるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛さんがこの前、月夜の晩 私たちのお家の前に坐つ
て一晩じょうるりをやりましたよ。私らはみんな出て見たのです。」